

研究テーマ ICFを使用した当院外来透析患者の分析

病 院 名 医療法人社団 健育会 西伊豆健育会病院

演 者 ○藤巻龍一(作業療法士)

概 要

【研究背景】

全国腎臓病協議会の血液透析患者実態調査報告書(2018)

¹⁾によると、後期高齢者からADLの部分的な介助量が増え、透析患者の障害されやすい項目は、ボタン操作、洗体背中、浴槽跨ぎとされる。作業療法士(以下、OT)として現状の当院外来透析患者の状態を捉えリハビリテーションにおけるニーズを明らかにする必要がある。

【研究目的】

当院外来透析患者に対し、ADL、IADLなど、生活状況を調査し(診療情報記録や各患者の会話から)ICF分類で表現する。当院外来透析患者のICFから包括的に見た生活上の問題点、地域性を含め特性を探る。

【研究方法】

- ・当院倫理審査委員会の承認、対象者の同意を得て行った。
- ・評価期間：2024年10月～11月
- ・研究対象：当院通院外来透析患者14名
- ・除外基準：重度神経麻痺、認知症がない患者
- ・研究デザイン：単施設横断的観察研究
- ・評価基準：診療記録、臨床場面から、ICFの「心身機能・身体構造」「活動・参加」「環境因子」を採点。「活動・参加」は能力、「環境因子」は阻害因子を評価。0点(問題なし 0-4%) 1点(軽度問題5-24%) 2点(中等度問題 25-49%) 3点(重度問題 50-95%) 4点(完全問題 96-100%)の5段階で採点。各ICF項目は百分率換算し比較。

【結果】

「心身機能・身体構造」、「活動・参加」、「環境因子」から、1項目あたりの点数は「環境因子」が他2つと比較し高かった。また「心身機能・身体構造」は点数のついた項目数は多く、1項目あたりの点数は低かった。

【考察】

「環境因子」が他2つと比較し高い結果となった要因としては、地域特有な要因(過疎化、僻地等)、各評価対象者の家族関係や透析治療を継続する際の周囲の協力者の有無等が影響として考えられる。今回の研究に限らず、透析治療そのものが、ICFの「環境因子」と関係性が非常に高いと言える。

「心身機能・身体構造」は点数のついた項目数は多いが、1項目あたりの点数は比較的低い結果となった。要因としては、今研究対象者は合併症含め何らかの症状はあるが、在宅生活を送る上では比較的大きな影響は受けていないと考えられる。

【結論】

今研究結果からOTとして直接的に介入出来る点は少ないと考えられる。長期透析治療は合併症を併発する可能性が高くADL、IADLを阻害する要因となる。内田²⁾は「IADL、ADLの関係はまずIADLが低下し、ADLが低下する順序性がある。」との報告がある。長期透析治療に伴い、患者との日常会話や他スタッフとの連携の中から患者の変化を察知することが、長期的なADL低下を予防できる可能性がある。

【引用参考文献】

- 1) 全国腎臓病協議会, 日本透析医会, 統計研究会の共同調査: 2016年度血液透析患者実態調査報告書.
- 2) 内田陽子: 在宅ケア利用者の自立促進に有効なケアに関する研究— IADL, ADL, 意欲改善得点とケア実施率との関連分析—: The Journal of the Japan Academy of Nursing Administration and Policies Vol 7, No 2, pp 31_40, 2004